

第25回学会総会の思い出

第25回 会長 杉 江 三 郎

第25回総会には私が会長に選出され、その主催を命ぜられたのでありますが、種々準備の末に、昭和47年9月28日(木)、29日(金)の両日、すでに秋の深まった北都の地、札幌の北海道厚生年金会館と札幌テレビ放送のホールを舞台にして開催したのであります。

当時までは多くのばあい、学会総会は2日の日程で組まれ、次第に演題数の増加につれて、プログラムの編成にはずいぶん苦心もあつたのでありますが、第26回総会以降は3日間の会期が慣例となり、ますます盛沢山となりましたことは、なりゆきからみて当然のことともいえましようが、あまりにも学会や研究会が過密となった昨今、学会の統合や会期についても再検討の余地がありはしないでしょうか。

ともあれ、会長としての共通の苦心は恐らく演題の取捨選択、シンポジウムや特別講演のテーマ、およびシンポジウムの企画などでありましようが、私のばあいもこれには随分意を用いたものでした。

一般演題につきましては、約30名のプログラム委員の方々にお願ひし、郵送による評価を受け、取捨選択の規準としたのでありますが、結局は会長の責任において、その採択を決定したこともまた止むをえない措置であつたと思ひます。一般演題は心臓、血管、肺、食道など144題を4会場に分散して採用したのでありますが、かねてから学会では討論に主眼をおくべきものとの私の持論から、演説7分、討論8分という画期的なプログラムを組んだのであります。1時間に4題、しかも討論時間に十分な余猶があり、これは大変好評だつたようであります。昼食の時間も1時間半と十分にとり、会員各位の便宜をはかりました。

この第25回総会におきます、いわばハイライトとでもいえます特別講演には、Mayo Clinic の Dr. Wallace の「複雑心奇型の外科治療」、英国の著名な Dr. Ross の「生体弁移植の臨床」のほか、当時体外循環で注目をあびていた膜型人工肺の問題をとりあげ、New York の Dr. Carlson に講演を依頼したことは、当時としては時宜になつた問題であつたといまでも考へている次第であります。

シンポジウムとしては、やはり当時としてはトピックの問題として「生体弁置換の遠隔成績」のテーマをとりあげ、阪大曲直部教授に司会をお願ひし、同時に Dr. Ross にもこのシンポジウムに参加して戴き、それなりの成果があつたものと、いまでは懐しく想ひ出すわけであります。

生体弁につきましては当時においても問題点が少なくなく、このシンポジウムでは我が国の現状をとらえ、将来を模索する目的もあつたのでありますが、なかなか確固たる明るい見通しもたて難い状況ではありました。しかしその後この生体弁は新しい方向に発展を遂げ、今日好成績とともに臨床的にも大きな注目をあびるようになった Glutaraldehyde 処理の異種大動弁 (Hancock の Xenograft) へと発展してきたことを考へ合せますと、当時のシンポジウムもたしかに有意義であつたと自画自賛しております。

もうひとつのシンポジウムには常に古くて新しい問題として「肺癌根治率向上のために」と題して肺癌のテーマをとりあげ、千葉大の香月教授に座長をお願ひしました。肺癌の治療は他の癌に

比較して、根治手術率の低い部類に属し、根治療法も困難なもののひとつではありますが、当時と現在を比べますとき、早期発見の努力と、肺癌治療に従事する当事者の研究と努力によって漸次治療成績も向上しておることはたしかであります。

もうひとつの特記すべきことはシネ・シンポジウムとして、音響効果や映像技術に定評のある札幌テレビ放送のホールを舞台に「むずかしい心臓手術のポイント」を企画し、司会は浅野献一教授にお願いし、1. 大血管転位症、2. 心内膜床欠損症、3. Fallot 四徴症、4. 弁置換術、5. 大動脈縮窄症、および6. 冠動脈の外科の6疾患をとりあげ、それぞれの分野の第一人者に映画の供覧と解説をお願いし、きわめて成果のあがったシネ・シンポジウムだったと思っています。最後に榊原先生に総括発言をお願いしましたが、映画による視覚情報の妙味と、年を重ねる心臓外科の進歩の跡を大いに賞賛されたのであります。これらの個々の疾患の手術治療は今日までも引き続き心臓外科の大きなテーマとしての意義を失なっていないことは御承知の通りだと思っております。

なお付言しなければならないことは、学会第1日目の夜、6時30分から8時30分の時間帯に5会場を使い、それぞれ特定のテーマについて43題のセミナー形成で夜の討論会を開いたことでもあります。この夜のセミナーにつきましては、盛沢山の昼の日程に加えて、夜までやらなくても、という批判もありますが、夜はかえって気分も落ち着き、案外活発な話し合いもでき、好評のようでありました。

この2日間の学会総会をかえりみて、時あたかも北国の錦秋の候、晴天に恵まれましたが、学会2日目、まさに終了直前になって天候が急変し、沛然たる雨に見舞われ、会員各位に少なからぬ迷惑をおかけしたことをいまもはっきりと思い出します。STV ホールのシネ・シンポジウムを終えて外へ出れば、しのつく雨、丁度教室員の車で約300米離れた厚生年金会館に馳せ参じ、無事閉会式をすませたような次第です。

その年はまた2月に冬期オリンピックが札幌市を中心に開催され、交通路をはじめとして諸施設も整えられた年でもありますので、このような大きな学会が開催できたものといまでも強く鮮明に思い出す次第であります。

(北海道大学教授)